

## 移動する研究室

### Mobile Laboratory

河村陽介 (MOBIUM / NODE)

KAWAMURA Yosuke (MOBIUM / NODE)

**Abstract** IAMAS consists of two schools: the Institute of Advanced Media Arts and Sciences and the International Academy of Media Arts and Sciences. The Institute is solely a graduate school (for obtaining a Masters Degree) and has one faculty and one course, namely Media Creations. There are 20 students in each year of the course. The Academy is a vocational college accepting 30 students each year who must have at least graduated from high school. The Academy was founded in 1996 and the Institute was opened in 2001. Both schools were established by Gifu Prefecture as part of a strategy to promote advanced information technology and the culture that develops from this. The schools' activities are closely linked with Softopia Japan, the hub of the Prefecture's information industry.

**Keyword** Mobility, Location Media, Geo Media

## 1. はじめに

本稿では、自身の運営する移動型ミュージアム／ラボであるMOBIUMの活動を振り返りながら、移動体と場所性に関するメディアテクノロジーを用いた実験やワークショップ、体験型のイベント、また各地でのIAMASの関係者をはじめとしたコラボレーターとの関わりについて書いていく。

## 2. MOBIUM について

### 2.1 成り立ちについて

IAMASでは在籍時に主にサウンドとビジュアルに関するインタラクティブ作品の制作を行っており、その傍ら、サウンドイベントなどの開催も行っていた。そういった活動のなかで、たまたまIAMASを訪問していたフランスのアーティスト、Mehdi Herberg氏に出会い、彼の主催するイベントshoboshoboに何度か参加することとなった。その折、彼から日本をバスでツアーするイベントを行いたいという話があり、ちょうど同じ頃、四方幸子氏の企画する日本ドイツ年のバスツアーが予定されているという話も出てきた。

以前よりフィールドワークやイベント等に使えるような移動型の空間が欲しかったということもあり、それらのタイミングが重なって、大型免許の取得と中古の大型バスが安価で手に入ったことから2005年よりMOBIUMをスタートするに至った。

## 2.2 MOBIUM の機能

MOBIUMはmobile（移動・車）museum（美術館）から成る造語で、車両本体、またプロジェクト全体の名称を指す。その名の通り、移動型の表現を行う場、ラボとして実験的なイベントや展示を行う用途として運用している。

機能としては、位置情報や環境情報を扱った、場によって変化する乗車体験型作品の実験やイベントの実施、近年は移動型ラボとして、3Dプリンタやレーザーカッターなどデジタル工作機器を積んで移動ワークショップを行なうなど、全国で多数のプロジェクトを実施している。アウトプットとして展示、ワークショップ、リサーチ、ライブ、ツアー形式など多様な形態を取っており、いずれも場の特性や移動性を特徴とした内容となっている。

なお、コンテナ車のようなトラックでも同じことはできるが、参加者が乗車し、移動時に場を共有し体験を得るということを重要視しているため、バスを車両として選択している。



図1 MOBIUMの活用例

## 2.3 プロジェクトについて

2005年の開始以来、30以上のプロジェクトを行っているが、その中でも印象的な最初の2つの企画「shoboshobo bus tour」「MobLab」についてフォーカスを当ててみる。

### 2.3.1 プロジェクト1 shoboshobo bus tour について

「shoboshobo bus tour」は前述の通り、フランスのアーティスト・Medhiが主催するパリと日本とのコラボレートイベントの総称であるが、このツアーではフランスのメンバー数名とともに日本を横断した。

本プロジェクトのコンセプトは「日本の音環境の考察」として様々な地に赴き、環境音のサンプリングとリアルタイム処理を施した環境音楽のリミックスによる巡業を行うという

ものである。およそ15箇所にとぼる各ホスト地では事前に手配した場所、もしくは現地にてリサーチを行い、即興的に巡業を始めるというもので、神社や海岸、鍾乳洞、ショッピングモール、新宿の繁華街などさまざまな場所を巡り、フィールドワークと環境音をリアルタイム処理したパフォーマンスを行った。それ以外にもバス内ではメディア・インスタレーションの展示や、現地アーティストとのライブパフォーマンスを行ったりしていた。

ちなみにこのツアーの初日にアクシデントがあり、大垣から山口へと向かう道中、高速道路でタイヤがバーストするという出来事が起き、初日にしてリタイヤかと思われたがロードサービスの数時間におよぶ対応によりひとまず復旧し、遅れは出たものの無事に山口のYCAMにてイベントを実施することができた。余談ではあるが、再生タイヤという表面だけをカット&ペーストしたもので、世の中には安価な再生品として普通に回っているが、耐久性が低いものかと思われる。これ以降は高速道路を使用することを控えた。

トラブルなどもあったが、特に大きな事故もなく1ヶ月間に及ぶ日本ツアーは幕を閉じた。



図2 shoboshobo bus tour(2005)淡路島にて

### 2.3.2 プロジェクト2 MobLab 日独メディアキャンプ 2005

間髪入れず、次のプロジェクトとなる「MobLab 日独メディアキャンプ2005」が始まった。

この企画はIAMASの「プロセスベースド・メディアアート・プロジェクトのための情報システム研究開発プロジェクト」との共同となるもので、バスを移動型の研究室として日独のメディアアーティストとともに国内のメディアセンターを巡り制作を行なっていくという



内容のものである。このプロジェクトではIAMASのチームによる位置情報システム／ネットワークサーバーの実装が行われ、ツアー中のバスの位置情報がリアルタイムに確認できるようになっている。いまでこそ当たり前の機能だが、当時はスマートフォンなどもなく、パケット通信も制限が大きかったため、移動体でのインターネットの常時接続は特殊な環境であった。そういった設備を装備したバスは日独のメディアアーティストを乗せ、およそ3週間にわたるツアーを行いその中でリサーチが行われ、作品が生まれていった。作品のひとつとして、exonemoのThe Road Movieは、バスの前後左右に取り付けられたネットワークカメラで風景を撮影し、サーバー上でバスのいた場所の風景をラッピングした折り紙を生成し、WEB上からダウンロードできるようになっており、遠方からでもバスのいた風景を感じることができるというネットアート作品がある。この作品は特に位置情報、場所の風景などの情報を活かし、ツアーの軌跡を記すというかたちでもMobLabのプロジェクトの象徴となるような内容となっていた。

またバス自体も各ホスト地で現地市民やアーティストにペイントなどしてもらい、外装が刻々と変化していくなど、さまざまな進行形のプロジェクトが行われていった。

これらの2つのプロジェクトはともに大掛かりな日本横断のツアーとなったが、MOBIUMにとって今後の方向付けとなる企画だったと思われる。



図3 MobLab(2005) せんだいメディアテークにて

### 2.3.3 その他のプロジェクト

以降もさまざまなプロジェクトを行っている。

バスの旅とプレゼンテーションイベント「assemble cruise」シリーズでは旅そのものの時間の過ごし方を再定義し、工業地帯をノイズミュージックを演奏しながら走る工場見学ツアーなどを実験的に実施している。コラボレーションとしては、写真家・美術作家である佐藤時啓氏によるバスの内部をカメラオブスキュラにするアートワーク「サイトシーイングバスカメラ」を埼玉や京都、大垣などで数回実施していたり、YCAM主催の「地域にもぐるアジア 参加するオープン・ラボラトリー」ではFabLab北加賀屋と共同でレーザー加工機や3DプリンタなどのFAB機器を搭載し、山口県阿東町にて移動FABワークショップスペースとして運用するなど、アーティストや美術館、自治体などとの共同企画なども行っている。またセンサー系の実験として、Bluetooth Low Energyを使ったワークショップで実際にバスや停留所に設置されたビーコンの距離などに応じて情報を取得する企画や、街の人の思い出話の音声データを位置情報と紐付けし、街を巡回する自動音声ガイドシステム、カメラで風景を取り込み、その場所の色深度によって、可変するモーター制御のディスプレイシステムなど、場所や位置情報、環境情報などに関連したさまざまな実験や制作を行うなど、移動型ラボとしての側面も持っている。

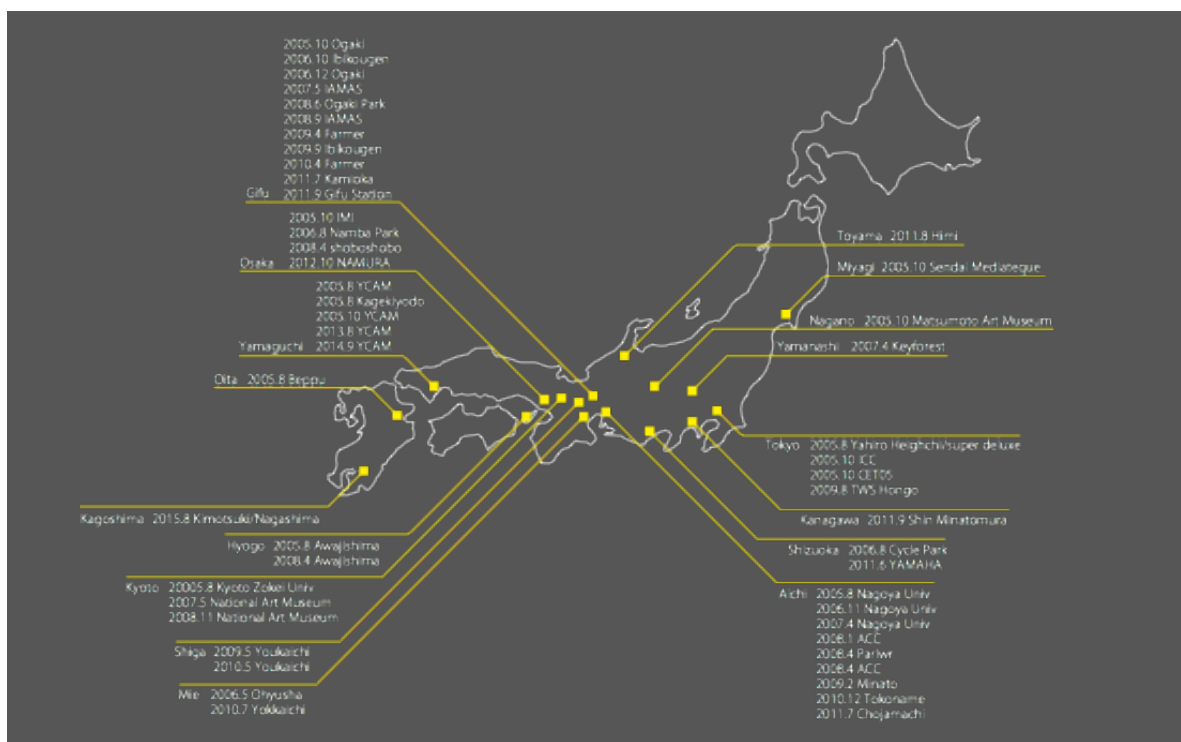


図4 これまでに訪れた箇所のマップ

### 3. 今後の展開について

#### 3.1 総括としてのツアー

寄稿時の2015年度時点においてMOBIUMは2005年の開始より10周年を迎えている。当初は3年間ぐらいのプロジェクトで終えようと考えていたが、結果的に長く続き、さまざまな地域の方々や、自治体、アーティストや、各地に広がるIAMAS関係者にご支援いただいたおかげかと思う。しかしながら、時間は積み重ねと同時に物理的な消耗を及ぼすこともあり、これまでもエンジントラブルなどに見舞われるなど車両の不調が起きており、修理なども幾度か行い維持してきたが、それとは別の問題で、ディーゼル排ガス規制による進入不可地域（関東、大阪等）の拡大なども懸念し、10周年を迎えると同時に車両の継続維持が難しいという判断から2016年3月にファイナルツアーとしてこれまでに訪れたことのある場所を中心に全国ツアーを実施する。このツアーでは環境情報系のセンサーを複数設置し各地で乗車体験型の作品を参加者に鑑賞してもらうことと、これまでの活動報告を交えて各地を巡回を行うものである。

#### 3.2 アップデートに向けて

このファイナルツアー以降は現在はまだ未定であるが、車両の刷新を予定している。運営開始当初から10年経つが、当初に比べ現在はネットワークインフラや、オープンソースのソフトウェア、ハードウェアの普及によりモビリティと情報システム、またそこから生み出される表現形態の多様化が期待される。節目となるこのタイミングでこれまでの活動で培ったイベントや実験、地域とのネットワークなどを活かして次の世代のMOBIUMをアップデート、構築できればと考えている。